

大阪大谷大学

令和五年度 入学試験問題（公募制推薦・前期A日程）

国 語

注意事項

- 一 問題用紙は、全部で十一ページです。解答用紙は一枚です。
- 二 解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。
- 四 問題用紙は持ち帰ってください。

□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ（設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

これが、もう少し彼女の年齢が上であれば、話は別だったかもしれない。A 十四、五歳になっていれば。思春期の反発や母親の庇護下ひごにいる鬱陶うつとうしさとぶつかる機会があつたならば。そうしたら、彼女の母の死は、彼女の音楽にとって別の意味があつたかもしれない。

しかし、母を愛し、母を喜ばせたいと母のためにピアノを弾いていた亜夜にとって、その存在が突然消えたことの喪失感はあまりにも大きかった。彼女は、文字通り、ピアノを弾く理由を失つたのである。

それに、母は教師やマネージャーとしても優秀だった。

本来、亜夜はのんびりしていて何事にも全く欲がない。かといって大勢の中で I 自若としていられるわけではなく、他人に競争心や嫉妬など、剥き出しの感情を向けられると、それだけで萎縮ひしてしまうような気の弱さもある。その辺りを承知した上で、母は彼女を護りまも、生来おおらかな娘のモチベーションをうまく上げられるよう、時に師として、時に辣腕マネージャーとして導いてくれたのだった。

母の死後、最初のコンサートで、亜夜は演奏をしなかった。

スケジュールは一年半先まで決まっていた。彼女のデビューCDを作ったレコード会社の人が、急遽きゅうきょマネージャーをツトめることになった。

母が生きている時から、家事は同居している祖母がほとんどをカバーしてくれていたのだから、B 生活に不自由することはなかった。亜夜自身、C 母がいなくなったということがどういふことなのか理解していなかったのかもしれない。

亜夜が初めて母の不在を意識したのは、地方のコンサートホールの楽屋だった。

新しいマネージャーは、ちゃんとスタイリストを付けてくれた。ステージ衣装をチェックし、髪を結び、ウスゲシヨウを施bしてくれ。それは、ずっと母がやってくれていたことだった。スタイリストは準備が終わると退室して、次の仕事に出かけていった。

ねえお母さん、紅茶は？

亜夜はそう言いかけて、自分が楽屋に一人きりであることに気付いた。

いつも濃い目で甘く淹れた紅茶を、人肌の温度でマホウビンに入れてきて渡してくれるはずの母の姿がそこになかった。

亜夜はドウヨウした。

足元がすうつと沈みこんでいくような巨大な喪失感が襲ってきた。

本当に、天井がうす暗く遠ざかっていくのを感じた。遠く遠く、どこまでも遠ざかっていく天井。すなわち、全身の血が引いていく

感触は、生温かいような、くすぐったいような、奇妙な感じだった。

① あたしは一人。一人きり。お母さんは、もうこの世界のどこにもいない。あたしに紅茶を渡してくれることも二度とない。

そう初めて認識した瞬間だった。

続いて、ハッと **II** 返る。

ここはどこだろう？あたしは何をしているの？

きよろきよろと辺りを見回す。

白い壁。鏡の上の丸い時計。楽屋。楽屋だ。どこかのホールの楽屋。

そして、唐突に、自分がコンサートの前であることに気付く。

そうだ、さつき、オーケストラとリハーサルをしたではないか。プロコフィエフの二番。何事もなかったかのように、自然に。

D あんなことができたのだろう。

そういえば、指揮者が、みんなが、感心していた。誰かが囁く声を聞いた。

よかったよかった、心配してたけど、一人でもしっかりしてるね。

たいしたもんだ。 **E** ショック受けてるかと思っただけど、落ち着いてた。

やっぱり、演奏することで乗り越えるしかないんだね。

あれはどういう意味だったのか。

そう考えると、心臓のあたりが冷たくなってきた。

ゾツとするような現実が、再び襲いかかってくる。

そうだったのだ。あたしは一人きりになったんだ。もうお母さんはいない。だから、みんながあんなことを言っていたんだ。一人きり。一人きり。

ステージマネージャーが呼びに来て、指揮者と共に舞台に進み出る瞬間も、頭の中にはその言葉が繰り返し鳴り響いていた。明るいステージの向こうで、期待に満ちた喝采が寄せてきた時も、亜夜の心は凍り付いたままだった。

彼女の目には、静かに光を浴びているグランドピアノしか見えていなかった。そして、彼女は理解した。

客席にも、ステージ袖にも、世界のどこにもお母さんはいない。

そうはつきりと理解した彼女に、グランドピアノはまるで墓標のように見えた。

③ かつてはそうではなかった。

ステージの上のグランドピアノはきらきらと輝き、中にはこれから溢れ出すはずの音楽がはちきれんばかりにして彼女を待っているのが見えた。

早く早く、あそこに座って早く音楽を取り出さなければ。

いつも駆け出したいのをこらえなければならぬほど、彼女はあの箱の中に詰まった音楽を見ていたのだ。そして、彼女がいきいきとした音楽を取り出すことを、何よりも、誰よりも喜んでくれる母がいた。

しかし、今は。

がらんとした、空っぽの、墓標。しんと静まりかえり、ひたすら沈黙と静寂に身を委ねている黒い箱。

あそこにもう音楽はない。あたしにとっての音楽は消えた。

冷たい確信が重いカタマリとなつて、彼女の中にすくと落ちたとたん、彼女はくるりと **III** を返していた。
 視界の中に、驚くオーケストラの団員と、ステージマネージャーの顔が見えたが、^④ 彼女は一度も振り返らず、スタスタと、やがて小走りになつて、ステージを降りていた。

客席のざわめきも、誰かの叫び声も耳に入らなかつた。

彼女は走つて、走つて、走つた。

人気のないホールの裏口のドアを押し、雨のそぼ降る暗い屋外に、 **IV** 飛び出していったのだった。
 かくて、彼女は「消えた天才少女」となつた。

(恩田陸『蜜蜂と遠雷』による)

プロコフィエフの二番……ロシアの作曲家プロコフィエフ(一八九一〜一九五三)のピアノ協奏曲第二番。

問一 二重傍線部 a〜e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄 **I** へ **IV** に入る最も適当な語句を、次のア〜エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

I	ア 悠然	イ 純然	ウ 断然	エ 泰然
II	ア 童心に	イ 初心に	ウ 我に	エ 原点到
III	ア 手のひら	イ 睡 ^{まひ}	ウ 笑み	エ 会積
IV	ア あわてふためいて	イ 我が物顔で	ウ 一目散に	エ 蜘蛛 ^{くも} の子を散らすように

問三 空欄 に入る最も適当な語句を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ（ただし、同じ記号は二度使えない）。

ア なぜ イ せめて ウ もっと エ まだ オ とりあえず

問四 亜夜が母の不在に気づくきっかけになったものは何か。最も適当なものを、本文中から二文字で抜き出して答えよ。

問五 母の死について亜夜が確信したことを象徴的に示す最も適当な箇所を、本文中から二十字で抜き出して答えよ。

問六 傍線部①「あたしは一人。一人きり」とあるが、この時の亜夜の心情として最も適当な箇所を、本文中から二十三字で抜き出し、その最初と最後の三文字を答えよ。

問七 傍線部②「だから、みんながあんなことを言っていたんだ」とあるが、母の死について亜夜と周囲の人々はそれぞれどのように認識していたか。本文中の語句を用いて、両者の認識の違いがわかるように、四十五字以内で答えよ。

問八 傍線部③「かつてはそうではなかった」とあるが、母が亡くなる以前の亜夜について説明した文章として正しくないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 優秀な教師でありマネージャーでもあった母を喜ばせたいと、母のためにピアノを弾いていた。
- イ 他人に競争心や嫉妬などの感情を向けられると、それだけで萎縮してしまう気の弱さがあった。
- ウ 生来のんびりしていて何事にも全く欲がないので、母に思春期の反発を感じることもなかった。
- エ いつも駆け出したいのをこらえなければならぬほど、ピアノの中に詰まった音楽を見ていた。

問九 傍線部④「彼女は一度も振り返らず、スタスタと、やがて小走りになって、ステージを降りていた」とあるが、こうした行動をとった時の亜夜の心情として最も適当な箇所を、本文中から十四字で抜き出して答えよ。

□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ（設問の都合上、原文の一部を改変している。設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

都市伝説の多くは、幾分かは「あり得る話」と思ふかもしれないが、基本的には情報としては眉唾①まゆつばものである。そもそも、冗談やウソであつてもさほど問題にならないようなことがテーマとなつてゐるものも多く、表だつて言い出すことのできない意見や感情のハツ口aとは言いがたいものも多い。都市伝説にケンチョbに見られるよううわさの特徴を捉えるには、うわさの「内容」にのみ焦点を当てるのでなく、別の視点が必要である。そこで、なぜうわさをするのか、人びとの動機の面から考えてみよう。

i、情報としてのうわさは「知りたい」が中心である。自分が巻き込まれた状況がよくわからないため、その状況を理解したいと思ふ。同じように思ふ人たちがコミュニケーションを重ねるなかで生まれてくる情報がうわさである。ゆえに、うわさはいい加減なものだと思われているが、意外と正確なことも多いのである。

ii、世論としてのうわさは、「言いたい」がカギになる。言論統制下にあつて言いたいことが言えないがゆえに、うわさのかたちで言いたいことを表明する。ゴシップ（人に関するうわさ）が悪口になりがちなのは、表だつて言えないことがうわさになるからだ。「言えないけれど言いたい悪口」がうわさの形式を借りて表明され、広まつていくのである。

そして、うわさに参加する大きな動機がもう一つある。それは、人と「つながりたい」である。人と人との日常的な会話、すなわち「おしゃべり」を通じてうわさは伝わっていく。人との関係を築く上で、うわさは役に立ってきたのである。

うわさには「ここだけの話だけれど」という枕詞②まくらごころばがしばしばつく。

本当に「ここだけの話」ではない。実はその話をみんな知つていたという経験を持つ人は少なくないはずである。

「ここだけの話」という枕詞は、「他人は知らないことを知つてゐる」というA 感の表明であり、「その話をあなたにだけに教える」と仲間意識を強めるために使われる。「二人が『ここだけの話』をたつたいま共有した」という新たな「秘密」からは親密性も生まれる。秘密の話の共有は人との「つながり」|| 関係性を強めてくれるのである。

iii、「返報性の規範 (norm of reciprocity)」も働く。心理学でいう「返報性の規範」とは、相手から好意や恩などを受けた場合、同等かそれ以上のお返しをせずにはいられなくなることを指す。

「私にだけ特別に秘密を教えてくれた」のであれば、自分がちよつとした秘密の情報を得る機会があれば、その人には真つ先に伝えようと思う。後日、そんな機会がやってくると、「ここだけの話」を今度はあなたからその人へ伝える。こうして、ますますその人の「つながり」^{II} 関係性が強まるのである。

「ここだけの話」ではない場合も同じである。被災地での地区単位のライフライン情報など、政府の公式発表やマスメディアなど制度的チャンネルでは伝えられない情報をもつぱら口コミ^{II} うわさで伝わる。こういった人伝^{ひとつて}でしか入手できない情報とは、言い換えれば、誰もが入手できるわけではない情報でもある。それを誰から入手できるかと言えば、自分と関係がある人からである。

うわさは既存の人間関係を通じて広まる。「誰もが入手できるわけではない情報」を伝えてくれた知り合いには感謝し、親密感を抱くのであり、「返報性の規範」も働く。うわさは人との関係性を強化する。

人とつながる上では、気持ちの共有も重要である。災害時や戦時にうわさが多く広まる理由は、オルポートとポストマンのうわさの公式に則り、重要なことがあいまいであるためである。誰にとつても重要な生命や先行きなどについての情報が足りないという状況がうわさを生み出すのである。しかし、危機的な状況でうわさが生まれる理由は情報を求めるからだけではない。

「大きな余震がきたらどうしよう」と強く不安を感じていると、自分だけで抱え込むより、誰かに話したいと感じる。そんなときに知り合いを見かけ、話しかける。知り合いと話すことで、自分の不安な気持ちを受け止めてもらうことができ、相手も同じように不安を感じていることがわかる。それだけで少し気持ちが楽になるのだ。しかし、これがうわさのきっかけになることがある。うわさを通じて気持ちを共有することも、人との「つながり」^{II} 関係性を強めるのである。

だからこそ、うわさを伝えてくれる相手には、その内容が事実^{事実}に反するのではないかと思つても、なかなか言い出しにくいのである。せつかく「私」に伝えてくれたのに、正面切つて否定すれば、相手の好意を無にすることになるからだ。相手が「事実」だと確信しているようなら、相手が情報の真偽を見抜けなかったと指摘することにもなる。もつとも「ウソではないか」と疑問に思つても、自分自

身その確証が持てない場合も多いだろう。だとすると、あえて疑問を出すことはしない。もちろんそれでも、事実関係が重要な話であれば、疑問を^dテイするかもしれないが、その場合でもやわらかく、相手との関係に^eハイリヨし、相手の面子^{メンツ}をつぶさないようにするはずである。

また、「友だちの友だちが体験した」という話の場合、典型的な都市伝説であるとわかっていても、普通あえて指摘はしない。都市伝説はネタとして楽しむために語られるからである。ⁱⁱⁱあえて指摘する人は、昔なら野暮、いまなら空気が読めない、と言われてしまう。

事実かどうか疑わしい話が広まるのは、うわさが **B** を基盤にしているためでもある。やはり、うわさは事実性からのみ理解、評価することはできないのだ。

ところで、誰かと顔を合わせると、何らかの話題が必要である。久しぶりに会う相手なら、お互いの近況を話すだけでもある程度時間が経つことだろう。 **iv**、そのうち話すネタがなくなってしまう、お互いの状況が違ふと話が盛り上がることもない。そうすると、昔話である。同窓会が典型的なように、「いま、どうしてる？」から始まった話が、いつの間にか昔の話へと移り、大いに盛り上がる。なぜなら、昔話は「共通の話題」であるからだ。

そう親しくない相手ならどうであろうか。自分のことをいろいろ話したくはないし、相手のことを聞き出すのも「 **C** 好き」だと思われる。しかし、一緒に過ごす時間を埋める必要がある。どうすればいいのだろうか。

話題に困ったときや場つなぎ、時間つぶしの話題として、共通の知り合いのゴシップ（人に関するうわさ）に花が咲くことは多い。お互いに知っている人の話なら、面白く、話も続くものである。あるいは、初対面の相手と話しているうちに、共通の知り合いがいることがわかって、「世間は狭いですね」などと盛り上がることもある。「共通の知り合い」は場つなぎになるだけでなく、初対面の相手との距離を縮めてくれるのだ。

（松田美佐『うわさとは何か ネットで変容する「最も古いメディア」』による）

問一 二重傍線部 a と e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄

i

 と

iv

 に入る最も適当な語句を、次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ（同じ記号は二度使えない）。

- ア しかし イ まず ウ 一方 エ さらに

問三 傍線部①「眉唾もの」の意味として最も適当なものを、本文中から十二字以内で抜き出して答えよ。

問四 傍線部②「枕詞」の意味として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア お約束の言葉 イ 前置きの言葉 ウ 注意喚起の言葉 エ 事実無根の言葉

問五 空欄

A

 ・

C

 に入る最も適当な語を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- | | | | | | | |
|--|---|------|------|------|------|------|
| <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>A</td></tr></table> | A | ア 期待 | イ 希少 | ウ 緊張 | エ 優越 | オ 背徳 |
| A | | | | | | |
| <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>C</td></tr></table> | C | ア 物 | イ 詮索 | ウ 世話 | エ 横 | オ 会話 |
| C | | | | | | |

問六 空欄

B

 に入る最も適当な語句を、本文中から八字以内で抜き出して答えよ。

問七 傍線部Ⅰ「つながりたい」とあるが、その目的は何か。最も適当な箇所を、「こと」に続くように本文中から十二字以内で抜き出して答えよ。

問八 傍線部Ⅱ「危機的な状況でうわさが生まれる理由」とあるが、情報を求める以外にどんなことが理由になるか。最も適切な箇所を本文中から十字で抜き出して答えよ。

問九 傍線部Ⅲ「あえて指摘する人は、昔なら野暮、いまなら空気が読めない、と言われてしまう」とあるが、その理由を本文中の語句を用いて五十字以内で答えよ。

問十 次のア～エについて、この文章中に書かれている内容に合っているものには○で、合っていないものには×で、それぞれ答えよ。

- ア うわさは人との“つながり”に関係性を強めてくれるものであるため、いい加減なものだと判断しない方がよい。
- イ うわさについて理解、評価するためには、内容や事実性だけでなく、動機の面から考えることも有効である。
- ウ 生命や先行きなどについての情報が足りない状況になると、人は不安を解消する目的でうわさを生み出す。
- エ ゴシップは初対面の相手との距離を縮めてくれるので、場をつないだり時間をつぶしたりするための話題となる。